

板鰐類研究会報

第 56 号

**Report of Japanese Society for
Elasmobranch Studies**

No. 56



ノコギリザメ

Pristiophorus japonicus

日本板鰐類研究会

2021 年 3 月

March 2021

Japanese Society for Elasmobranch Studies

会 長 中野 秀樹 (水産研究・教育機構 水産資源研究所)
副 会 長 山口 敦子 (長崎大学 水産・環境科学総合研究科)
編 集 者
編集担当幹事 後藤 友明 (岩手大学三陸水産研究センター)
編集委員 矢野 寿和 (水産研究・教育機構 水産大学校 海洋生
産管理学科)
仙波 靖子 (水産研究・教育機構 水産資源研究所)
富田 武照 (沖縄美ら島財団)

事 務 局 〒277-8564 千葉県柏市柏の葉 5-1-5
東京大学大気海洋研究所
日本板鰓類研究会 兵藤 晋

ホームページ <http://www.jses.info/>
(旧 URL <http://jses.ac.affrc.go.jp/> から変更しました)

Office JAPANESE SOCIETY for ELASMOBRANCH STUDIES
C/O Hideki NAKANO
Atmosphere and Ocean Research Institute,
The University of Tokyo
5-1-5 Kashiwanoha, Kashiwa, Chiba 277-8564 JAPAN
* TEL; +81-4-7136-6202, FAX; +81-4-7136-6206
* E-mail; hyodo@aori.u-tokyo.ac.jp
* Home Page; <http://www.jses.info/>

目 次

会長就任のご挨拶	1
中野 秀樹	
追悼文（白井 滋さんを偲んで）	2
後藤 友明	
連絡事項・Information	
1. 事務報告	5
2. 編集委員会報告	7
板鰓類研究会報作成要領	9
3. 会計報告	11

会長就任のご挨拶

中野秀樹（水産研究・教育機構 水産資源研究所）

本年、田中会長の後任として、当会会長の大役を仰せつかりましたので、就任のご挨拶をさせていただきます。

日本板鰓類研究会は1977年に東京大学海洋研究所の水江一弘先生のご尽力で板鰓類研究連絡会として発足いたしました。その後1988年に日本板鰓類研究会に名称を変更し現在に至ります。発会当時の目的はサメ類研究という当時としては（現在もそうかもしれませんが）、マイナーな分野の研究者同士の情報交換と研究協力にあったと思います。会の発足により、その当初の目的はある程度実現されたと思っております。さらに2007年に就任された仲谷会長は会員を研究者以外にも広げ、当会の裾野の拡大を目指しました。これも昨今の海洋生物に対する一般の興味の拡大もあり、ある程度の成果を達成することができたと思います。

今後は再び当研究会発足当時の目的に戻りまして研究者同士の情報交換や研究協力を強化して参りたいと考えています。そして研究者以外の会員については昨今のコロナの状況下で普及しつつあるビデオ会議の手法を使ったシンポジウムのネット中継など、ネットメディアを多用した情報発信により会員サービスを行ってゆきたいと考えています。本会運営にあたり、研究会幹事の方々との連携をとりつつ、上記のような方針で研究会の運営を行っていきたいと考えておりますので、どうかご理解とご協力をお願いいたします。

令和2年10月9日

日本板鰓類研究会長

中野秀樹

白井 滋さんを偲んで

岩手大学農学部

後藤 友明

2020年9月9日夜、北海道大学の今村 央さんから一通のメールにより白井 滋さんの訃報が伝えられた。4月から病氣療養中で、前日に容体が悪化して2020年9月9日8:14に息を引き取ったとのこと。63歳とのこと。世間がコロナ禍の中、あまりに早すぎる白井さんの訃報をたった一通の電子メールで知らされ、ただ驚くばかりで信じることができなかった。私は、サメの研究を志して北海道大学水産学部動物学講座の門をたたいてから大学院を修了するまで一貫して白井さんを師と仰いできた。長く白井さんの背中を追い続け、共にサメ研究に向き合ってきた一人として、白井さんとの接点であったサメ研究を中心に、足跡を振り返りながら哀悼の意を表したい。

白井さんは、私が研究室に入った時、一度社会に出た後博士課程の大学院生として戻ってきた時であった。私が、大学院での研究テーマとしてサメの研究を行いたいなどと何の具体性もない漠然とした希望を出したところ、白井さんはこんなざっくりとした希望（妄想と言っていいかもしれない）に対して真摯に考えて下さり、大型個体が多くサンプルの入手が難しいけど、テンジクザメ類をやってみたら、とご進言下さったことを思い出す。当時の動物学講座は、優秀な大学院生が多く在籍し、当時の分類学では流行の先端となっていた分岐分類学を理解し、それぞれの研究分野でこの理論を使いこなすべく日々議論を重ねていた。白井さんは、そのような研究室の中では常にリーダー的な存在で、分岐分類学の本質から、統計学的手法を盛り込んだ応用に至る理論と実践に至る方法論では対象分類群の異なる大学院生・教員からも頼りにされていた。当時の研究室は、少ない実体顕微鏡を多くの院生が奪い合うように利用しており、サイズの大きな板鰐類を観察できる顕微鏡は1台のみであったため、私が大学院生の時は、これを占拠すべく6時前から研究室に通っていた。白井さんは、毎朝7時過ぎに研究室に来て自らの研究を始めるのだが、一通りご自身のことを終えるとすぐ斜め前で顕微鏡をみている私に話しかけてきた。私が観察している筋肉片などを横から見ながら、白井さんがみてきたツノザメ類やカグラザメ類のほか、様々な板鰐類全体の情報を教えて下さり、労せずしてテンジクザメ類の特徴を知る機会を与えて下さった。他の大学院生が来るまでのこの朝の時間は、白井さんと一対一で議論を行うことのできる貴重な時間で、方法論やその根底にある考え方を含めて今の私を築いてくれた貴重な時間であった。朝の定例会を通し、当時白井さんが考えていたことをたくさん教えていただいた。

"Squalean Phylogeny (Shirai, 1992)"は、そんな白井さんと議論していた話が一冊の本として具現化されたもので、これが発刊されたときはまるで我が身のことのよう嬉しく思い、夢中になって読んだことを思い出す。このとき白井さんに影響を与えていたのが John G. Maisey や Colin Patterson といった化石を扱った板鰐類の大進化に関する研究であった。当時、板鰐類の大進化では、Galeomorph というネズミザメ類、メジロザメ類、テンジクザメ類にネコザメ類を加えた一群を自然群と見なす動き (Compagno, 1973) や、ツノザメ類とカグラザメ類やカスザメ類との類縁関係 (Maisey, 1980) など、化石種の位置づけも含めた議論が活発

に行われてきた。そこに大きな一石を投じたのが白井さんであった。白井さんが "hypnosqualean group" (カスザメ類, ノコギリザメ類, エイ類を束ねた群) のアイデアに行き着いたとき、白井さんと私は隣で顕微鏡をみていた。隣から、決定的な形質が見つかったかもしれないと興奮したように話しかけてきた。これは、*Flexor caudalis* という尾鰭の筋肉が尾柄にまで侵入しているという、“何の変哲もない” 形質だが、これまで数多のサメ・エイ類の筋肉を観察してきた白井さんにとって、これが板鰐類の大進化においてもものすごく重要な特徴であると直感的に分かったのだと思う。勿論、これも最節約原理に基づく分析の結果得られた派生形質の一つにすぎず、これら 3 群を特徴づける共有派生形質はこれだけではないが、その一つであるとの時点ですでに確信していたと思う。このほか、白井さんとの朝の定例会では様々な議論を行った。ここで行った議論は、それから 30 年近く経過した今も私にとって大切な経験値として生き続けている。

ここまでの話を一見すると、白井さんは、古典的な系統学者であるように思われるかもしれない。しかし、分岐分類学が科学として位置づけられるための多くの最新の方法論を理解し、科学であるとの本質を失うことなくこれまでのサメ・エイ類研究では考えられないほどの多くの形質を細部にわたって取得して研究を進めてきたことは疑いようのない事実である。丁度このことから分子系統学が台頭し、DNA 情報の分析結果からは、この "*Squalea*" を否定してサメ・エイ 2 分岐を指示するとの成果が次々と出されはじめた。板鰐類研究創生期に立てられたサメとエイの 2 分岐は、最新技術を持って再びその地位を取り戻した。それに伴い *Squalea* という分類群の単位は使われなくなり、若い会員の多くはもはやその存在すら知らないかもしれない。しかし、無限大にある形態学的な情報から、その時点で得られる最大限のデータに基づき導き出された白井さんの成果は決して色褪せるものではない。むしろ、*Squalea* や *Hypnosqualean group* の共有派生形質として評価された形質が“原始的な” 情報であるのか、それとも生態学的な特徴に起因した並行進化によるものなのか、など新たな疑問として後世に引き継がれたものと考えるべきだろう。

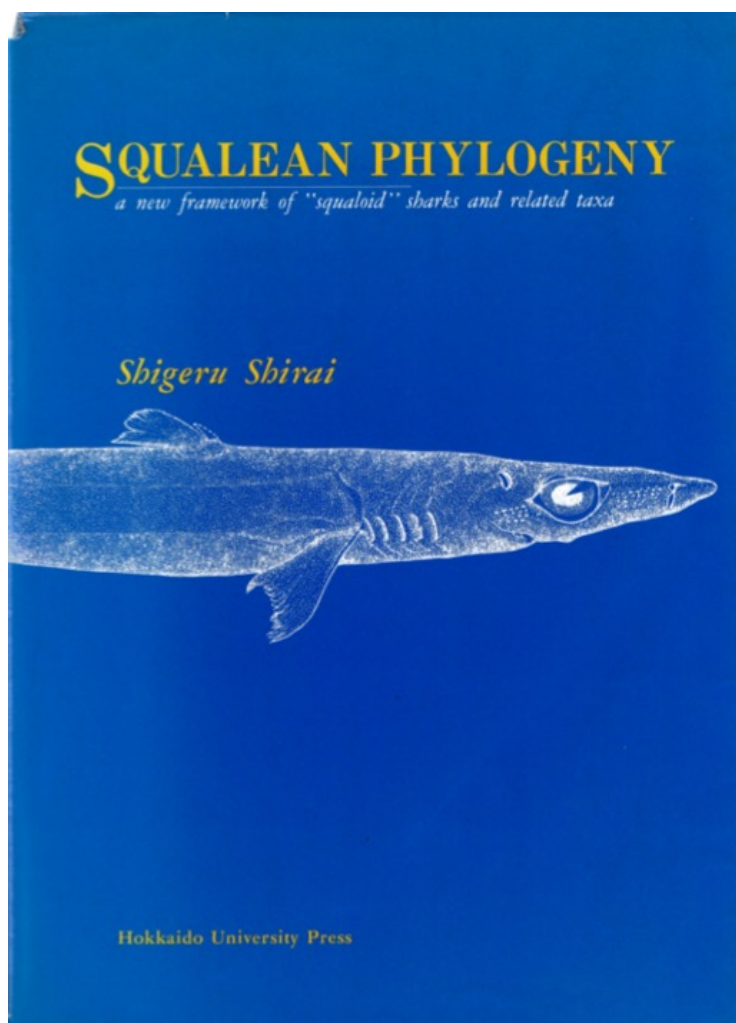
大学院修了後、白井さんは、西海区水産研究所、日本海区水産研究所（現水産研究教育機構）で水産資源評価に関わる業務で活躍された後、東京農業大学網走キャンパスに移られた。この間、日本海の形成過程をバイ貝類の系統から考える研究を軸にハタハタの生物地理学的な研究を行い、私も三陸産サンプル提供でご協力させていただいた。いずれも白井さんらしい壮大な研究である。一方で、板鰐類については、一度ご本人から聞いた際に、ご自身の立てた仮説を自分自身で検証すべく分子系統学的な手法を身につけて研究を進めてきたが、やはりサメ・エイ 2 分岐は揺るがないと少し寂しそうにおっしゃっていた。科学だから、といってしまうまでもだが、どんな科学者も、自分が手がけたプロセスと成果には人一倍強い思い入れを持ち、そこへの自負は少なからずあるはずである。それは全長 5m を超えるサメ 1 個体であっても、たった一滴の DNA 抽出液も変わりはない。そのような、ある意味「最新技術を駆使した伝統技術職人」のような方が白井 滋という板鰐類研究者であったと思う。

出来の悪い弟子（ご本人は舎弟関係と思っていないかもしれない）からでは甚だ失礼かもしれないが、そのような白井さんにあらためて敬意を表し、ここに深く哀悼の意を表します。

2021 年 3 月 16 日

参考文献

- Compagno, L. J. V. 1973. Phyletic relationships of living shaks and rays. Amer. Zool., 17: 303–322.
- Maisey, J. G. 1980. An evaluation of jaw suspension in sharks. Zool. Amer. Mus. Novit., 2706: 1–17.
- Shirai, S. 1992. Squallean Phylogeny a new framework of "squaloid" sharks and related taxa. Uokkaido University Press, Sapporo. pp. 151+pl. 578.



Squallean Phylogeny の表紙と白井さんのサイン

— 連絡事項 —

1. 事務報告

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大により、みなさま大変なご苦勞をなさっておられることとお察し申し上げます。首都圏はまだ非常事態宣言が解除されておらず、2020 年 12 月に予定されていた板鰐類研究会も残念ながら 1 年間の延期を余儀なくされました。2020 年度より田中彰前会長から中野秀樹現会長へと体制が移行され、新会長のもと様々な活動を計画しておりましたが、なかなか進めることが出来ず、事務局として心よりお詫び申し上げます。2021 年度は、12 月に予定している板鰐類研究会シンポジウムを含め、日本の板鰐類研究を盛り上げていけるよう活動いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。以下に、新体制についてまとめます。

1) 2020 年 4 月、前役員の任期満了にともない、新役員の選出を行う必要がありましたが、コロナ禍の中、これまでのような対面会議をもつことが困難であったため、Web 会議ならびにメーリングリストにより新役員の選出を行うこととしました。前役員による議論の結果、新会長に水産研究・教育機構 水産資源研究所の中野秀樹氏を選出し、副会長には長崎大学の山口敦子氏、下記のとおり幹事・監事・委員を選出し、会員による承認を受けました。

2020-2022 年度 役員体制

会長：中野秀樹（水産研究・教育機構，水産資源研究所）

副会長：山口敦子（長崎大学，水産・環境科学総合研究科）

（シンポジウム企画および国際対応担当）

幹事：

兵藤 晋（東京大学大気海洋研究所）（総務・財務担当）

佐藤圭一（沖縄美ら島財団）（研究交流・広報担当）

後藤友明（岩手大学三陸水産研究センター）（編集担当）

監査役員：堀江 琢（東海大学海洋学部）

監事：北村 徹（日本エヌ・ユー・エス）

委員：

古満啓介（長崎大学，水産・環境科学総合研究科）（会計担当）

高木 互（東京大学大気海洋研究所）（総務担当）

野津 了（沖縄美ら島財団）（広報担当）

松本瑠偉（沖縄美ら島財団）（広報担当）

富田武照（沖縄美ら島財団）（編集担当）

矢野寿和（水産研究・教育機構，水産大学校，海洋生産管理学科）（編集担当）

仙波靖子（水産研究・教育機構，水産資源研究所）（編集担当）

2) メーリングリストについて

これまでのメーリングリストは、会員が誰でも投稿でき、会員間の連絡交流に大きく役立ってまいりました。一方で、これまでのメーリングリストは水産研究・教育機構のサーバを使用していて機構の方以外は扱えなかったため、広報機能を沖縄美ら島財団を中心に再構築し、研究会からのさまざまな連絡をお伝えするための新規メーリングリストも整備しました。これまでのメーリングリストは、今後も会員間の交流に活発にご活用下さい。会員のみなさまには、新旧のメーリングリストが届くかどうかのテストをさせていただいておりますが、不備などありましたらお知らせ下さい。

3) 会報について

会報はこれまで冊子体を郵送しておりましたが、世界的な情勢ならびに役員業務も鑑み、電子化することを検討しました。印刷代などの支出削減による予算の有効活用というメリット、冊子体という研究会と会員のつながりや、公開範囲の設定の難しさなどのデメリットも考慮した結果、電子化の方向で進めることといたしました。ご理解いただけますようお願いいたします。

2020 年版には間に合いませんでしたが、今後は号ごとに特定のテーマを決めたり、原著論文の紹介、データ論文、他学会やシンポジウムのプロシーディング、繁殖賞など水族館の実績に関する話題を盛り込むなど、様々な工夫をしてまいります。

4) ホームページについて

会報を電子化することにより、ホームページ更新に充てる予算を増額できるようになります。こちらも作業が遅れており申し訳ありませんが、最新の研究動向や出版物情報をアップデートしてまいります。英語版の作成や、SNS 媒体での情報発信も検討しております。

5) シンポジウムについて

2020 年度は、東京大学大気海洋研究所の共同利用研究集会という形で 12 月 17-18 日に開催を予定しておりましたが、前述の通り新型コロナウイルス感染拡大の影響でシンポジウム開催を断念することとなってしまいました。2021 年 12 月に開催するべく、新たに共同利用研究集会に採択されておりますので、本年の 12 月には 2 年ぶりの研究会を開催する予定です。ただ、完全対面形式での開催が出来るかどうかは今後の感染収束状況を待たねばなりません。一方で、共同利用研究集会は配信による開催もできるようになっておりますので、対面開催がどの程度のレベルで出来るかによらず、対面・配信のハイブリッド形式での開催を考えていく予定です。このことにより、ご多忙ゆえ出張が困難な方々にもオンラインで参加していただくことができ、これまでよりも多くの会員に参加していただくことができるようになると考えています。シンポジウムの情報については、夏頃には詳細をお知らせできるものと考えておりますので、予定しておいていただけますようお願いいたします。

(事務局 兵藤記)

2. 編集委員会報告

1) 板鰓類研究会報作成要領の作成について

新体制への移行に伴い、役員会での決議（上記 1-3)) に従い、編集委員会にて板鰓類研究会報の基本的なルール作成に着手し、2020 年 6 月 14 日から 8 月 19 日にかけてメールによる審議を繰り返して「板鰓類研究会報作成要領（案）」をとりまとめ、2020 年 8 月 31 日に役員会に提案しました。2020 年 9 月 3 日に役員会で本案が認められ、2020 年 9 月 5 日に「板鰓類研究会報作成要領」として会報への投稿呼びかけとあわせて JSES: 327 によりご報告いたしました。

今号については、会員への周知が遅れてしまいましたが、次号以降はより早めに会報発行のご案内をしたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

2) 第 1 回編集委員会報告

板鰓類研究会報第 56 号の作成にあたり、2021 年 3 月 22 日に委員会を開催しました。議事録は以下の通りです。

板鰓類研究会報編集委員会 議事録

日時：2021 年 3 月 22 日 19:00～20:00

方法：zoom を用いたオンラインによる議論

板鰓類研究会報第 56 号について、原稿の内容を審議した。

1. 表紙・目次について

発行者リストについて、水産研究・教育機構の機構改革に伴う所属の変更が中野会長、矢野編集委員、仙波編集委員であったことから、改めて確認し修正した。事務局の URL 英文版が従来のままとなっていたので、修正した。矢野編集委員の所属について、山口副会長の記載にあわせて学科名まで記載することとした。

2. 会長就任の挨拶文について

中野会長所属組織名の変更に伴って、所属名称を水産研究・教育機構 水産資源研究所に修正した。

3. 情報について

総務担当幹事から提出頂いた事務報告について、「です・ます」で記載されている中で、一部「である」記述となっている部分について、表現を統一するために修正した。

役員体制について、事前に総務担当幹事から修正いただいた内容について、各幹事・委員の所属名称確認を行った。

4. 書評原稿について

書評として提出いただいている原稿について審議を行った。当初の書評として扱うべきか、それとも書籍紹介として扱うべきか検討を行った。幹事から、本原稿については、板研会員に向けた広報として位置づけられる会報としては、批評的に掲載する書評としてよりも、あくまでも会員にむけた書籍の紹介とした方が良いとの提案がなされた。このことについては、幹事より昨年作成された板鰓類研究会報作成要領を根拠とする旨説明があった（要領では、書評としての位置づけは設けていない）。

本案については全委員の賛同が得られ、それに関連して「評者」を「紹介者」としてはとの意見が出された。

これにあわせて、一部の段落は、紹介対象著書の内容と言うよりも引用文献に対する批評となっており、著書紹介と位置づけるならば、削除した方が書籍紹介としての内容としてより分かりやすく、趣旨から逸脱することもないため良いのでは、との意見が出され、委員で合意が得られた。

また、一部の内容にポリティカルな内容を含むと判断し、削除をお願いした方が良いと考えたとの提案があり、賛同が得られた。

5. 白井さん追悼分について

白井さんの追悼文について検討し、特に修正等の意見はなかった。

6. 今後の取り組みについて

本委員会を受けて、修正が必要と考えられる原稿については著者にその旨お願いすることとした。返信を待つて全ての原稿を委員で再確認し、役員会に諮った上で最終稿とすることとした。

本年度は新体制への移行があったことから、年度途中からの始動で、編集委員会についても新委員の体制となり、全体の進行が遅れてしまったうえに、投稿がほとんどない状況となった。

新要領により、原著論文としての名目がなくなったことで投稿数の減少につながるかもしれないとの意見が出された。

新体制への移行時に検討した「特集」を設定してテーマを決めて誰かにとりまとめを依頼して原稿を集めてもらうことや、新たな採集情報などのデータ論文的な原稿の依頼など、編集のスケジュール含めて新年度は早めに動き始める事とした。

年度明けには再度 zoom 等を活用したビデオ会議で委員会を開き、新年度の取り組み内容の検討を開始することとした。

以上

板鰓類研究会報作成要領

1. 目的

板鰓類研究会（以下、研究会とする）は、研究者間の交流や情報交換，国内を中心とした板鰓類に関する情報のアーカイブ等を目的として板鰓類研究会報（以下、会報とする）を定期的に発行する。

2. 発行方式

会報は、PDF 化した電子媒体として原則として年 1 回発行し、研究会全会員に配布する。なお、電子媒体による配布が困難な会員に対しては簡易製本した印刷物として郵送により配布する。

なお、板鰓類研究会公式ホームページへの掲載は、発行日から 1 年経過後に行うものとする。

3. 内容

会報は、広くは軟骨魚類を対象とする板鰓類研究を通じて得られた成果に基づく総説，特集，報告，記録，研究論文紹介のほか，研究室紹介，シンポジウム等の報告，書籍紹介，研究会の活動報告，その他から構成される。

（1）総説

特定の研究分野における研究の概要を要約したもの。

（2）特集

事前に会報委員により選定した分野に精通する研究者のとりまとめによる最新の話題紹介。

（3）報告

一般会員からの自由投稿による板鰓類研究に関連する話題の紹介。

（4）記録

板鰓類の採集や発見等に関する新規知見として記録すべき情報。

（5）研究論文紹介

最近掲載された学術論文のうち，トピック性の高い論文の内容紹介。

（6）研究室紹介

板鰓類研究を行っている研究室からの研究室やメンバー，研究内容等の紹介。

（7）シンポジウム等

板鰓類に関するシンポジウム等のイベントについての参加報告や内容等の紹介。

（8）書籍紹介

板鰓類研究に関連する書籍の紹介。

（9）研究会の活動報告

研究会の活動に関する一連の報告。

4. ポリシー

会報はピア・レビューを伴わない会員による情報提供を目的とする刊行物とし，ここでの

記述は学名および標準和名を含めて命名行為にはあたらない。また、研究会としての活動趣旨にそぐわない思想・信条等または既往知見の無断盗用が疑われる内容を含むと判断される原稿や査読が必要であると判断した原稿については、著者に対して修正を求めるか掲載を断ることがある。

5. 役割

会報は、会報担当幹事と委員からなる会報委員会がプログラム案の作成・編集、特集の立案、編集スケジュールの作成にあたる。会報委員会は、ML 等により会員に対して話題提供を呼びかけるほか原稿の提出期限を伝える。提出された原稿は、委員会内で内容を確認し、全ての内容を取りまとめた上で幹事会に諮り、同意の上発行される。

6. 発行スケジュール

- (1) 会報作成要領の作成：～8 月下旬
- (2) 原稿やテーマ案の依頼：8 月下旬～9 月上旬
- (3) 原稿の提出期限：12 月中旬
- (4) 修正・改訂作業：1 月末
- (5) 幹事会への提案：2 月上旬
- (6) 発行：3 月上旬

2. 会計報告

板鯉類研究会令和元年度会計報告 2020年 4月 1日現在

収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越	1,187,760	
会費2019年度入金分	107,000	
合計	1,294,760	

支出の部

項目	金額	備考
会報第55号		
印刷料	120,000	
消費税	12,000	
振込手数料	220	
会報発送料	28,460	
海外発送料	8,590	
その他郵送料	2,430	新規会員、会計用明細、国会図書館
ホームページ関連		
サーバー利用料	13,887	2019年4月～2019年12月(1543円/月)
ドメイン使用料	3,024	*2020年よりサーバー変更
合計	188,611	
次年度繰越金	1,106,149	

2020年 4月 1日現在の郵便局残額と照会した結果、上記の通り相違ありません。

会計担当 堀江 琢 (自署 堀江 琢 印)

会計担当 藤波 裕樹 (自署 藤波 裕樹 印)

監査担当 石原 元 (自署 石原 元 印)

年会費 正会員2,000円/年 もしくは 10,000円/6年
学生会員1000円/年

振替受払通知票

00250-0- 111916

令和 2年 3月28日

横浜 貯金事務センター

通知番号及び種別		25号	1,104,149円
受 入 常 規	払込金(一般)	□	
	払込金(新振替)		
	払込金(DT)		
	払込金(MT)		
	振替受入れ		
	会金払込み		
	自給払込み		
	その他受入金		
	電 信 振 込 金		
	振替受入れ	1	2,000
払 出 常 規	現金払出し		
	振替払出し		
	簡 易 払		
	その他払出金		
	現金払出し		
	振替払出し		
	加入者即時払		
	小切手払渡し		
	料 金		
	現 在 高		1,106,149

料 金 内 訳	
払込料金	円
払出料金	
振替料金	
その他料金	

小 切 手 番 号	

小 切 手 支 払 保 証	
	円

明細番号	始番号	終番号
電信受	1	1
電信払		

2



振替受払通知票

00250-0- 111916

令和 2年 4月 1日

横浜 貯金事務センター

通知番号及び種別		1号	1,108,149円
受 入 常 規	払込金(一般)	□	
	払込金(新振替)		
	払込金(DT)		
	払込金(MT)		
	振替受入れ		
	会金払込み		
	自給払込み		
	その他受入金		
	電 信 振 込 金		
	振替受入れ	1	2,000
払 出 常 規	現金払出し		
	振替払出し		
	簡 易 払		
	その他払出金		
	現金払出し		
	振替払出し		
	加入者即時払		
	小切手払渡し		
	料 金		
	現 在 高		1,108,149

料 金 内 訳	
払込料金	円
払出料金	
振替料金	
その他料金	

小 切 手 番 号	

小 切 手 支 払 保 証	
	円

明細番号	始番号	終番号
電信受		
電信払		